

# 内なるグローバル化

ぶぎん地域経済研究所 代表取締役社長 島雄 廣

## ガバナンス能力

この「えこのみすと通信」も今回が最終回となったが、最後のテーマはグローバル人材の育成について考えてみたい。

日本企業は少子高齢化と人口減少による国内市場の縮小に対応して、新興国市場の需要を取り込むためにグローバル化を加速している。

現在、日本メーカーの多くは、海外に工場を展開し販路を拡大する段階から、マーケティングや商品開発、財務戦略などの戦略機能に至るまで現地化させる段階に進んでいる。

このような海外拠点への権限委譲が進むと本社のチェック機能は低下することになるが、このリスクを軽減するために重要となるのが、海外拠点をガバナンスする能力を持ちマネジメントできるグローバル人材の育成である。

## 教育現場への期待

留学生を含めた外国人の採用を積極化させている企業もあるが、やはり世界で活躍できる日本人の人材確保が長期的にも重要であり、日本の教育現場におけるグローバル人材育成に向けた取り組みに対する期待は大きい。

日本の大学では、リベラル・アーツ(教養)教育の充実や交換留学、外国人教員採用の拡大など国際化に向けた取り組みは強化されているが、大学だけでなく高校段階においても世界で活躍できる人材の育成を目指した教育を拡充すべきではないだろうか。

若者の「内向き志向」が指摘される中、多感な高校時代に異文化を体験することができれば、自分がいかに日本のことを知らなかったかを思い知らされることになり、日本人としての自覚と積極的な海外へのチャレンジ精神の醸成が大いに期待できる。

## 自分の国を知る

しかしながら、現在の高校教育はそのような時間的余裕を与えていないようだ。今、高校では日本史が選択科目になっており、高校生の3~4割が日本史を勉強せずに卒業する。「日本と米国が戦争したことさえ知らない」生徒がいる。

これは早い段階から文科系と理科系に進学コースを分けて、志望校に必要な受験科目だけを徹底的に学ばせるという受験体制にあり、生徒だけを責めるわけにはいかない。

また、学習方法が教科書の内容を覚え、問題集の演習で反射神経を鍛えるという知識詰め込み型であるため、日本文化圏を出ると通用しない。自分で物事を考え、論理的にまとめる習慣が身につけていないため、「あなたの意見を述べて下さい」と言われても、何も言うことができない。

グローバル人材の育成において考えるべきことは語学力だけではない。自分の国の文化や歴史を知り、世界を知らなければ真摯かつ正確な意見交換はできないし、自分の考えを論理的に相手に説明できなければ、コミュニケーションは成り立たず、相手から尊敬されることもないだろう。

## 淘汰の時代

日本の18歳人口は、1992年の205万人をピークに減少を続けており、2011年に120万人となり、2031年には87万人になると予測されている。大学は既に全入時代を迎えており、これからは高校も含めた淘汰の時代に突入する。今後の競争に勝ち抜くためにも、教育現場における「内なるグローバル化」が進むことを期待したい。

(本稿は埼玉新聞3月7日に掲載したものです。)